〔研究論文〕

日本各地遺跡の動物遺存体

検出動物標本について

前　編

哺乳類　鳥類・爬虫類

金子浩昌・西本豊弘

北海道から南西諸島に至る新石器時代とそれ以降の遺跡において知られる動物の遺存体は、遺跡をめぐる環境的な条件と年代的な変化のなかにおいて、特徴のある在り方を各地にみることができる。人と動物との関わりを示す基本的資料としての動物遺存体のこうした在り方を極めて概要的であるが次にのべておきたい。併せて、特に重要ないくつかの動物種については動物学的な見地からの研究の成果、あるいは系統論にふれることがあると思う。ただ、限られた紙数における記述であるので、資料の個々についてのべる内容は限られたものにならざるを得なかった。

動物種の記述は、系統分類学的な位置づけに基礎をおいたが、考古学的な在り方も重視したので、多くの遺跡において主体動物種から先に書かれることになった。

全体の記述は、北海道と本州以南に大別し、北海道では縄文期より擦文、オホーツク文化期を、本州以南では縄文・弥生期より以降、近世に至るまでの資料を対象とした。

執筆分担では、北海道のオホーツク関係の獣類については西本豊弘が担当した。

なお後編において、貝類、魚類その他の動物種にふれたい。また関係遺跡の位置を示す地図、文献などは後編にまとめるつもりである。

Ⅰ　北海道　縄文期、続縄文期

脊椎動物　Vertebrata　哺乳綱　Mammalia

陸棲獣類　Land Mammals

偶蹄目　Artiodactyla

〔シカ科〕Cervidae　　**エゾシカ**　Cervus nippon yesonensis

北海道における最も重要な狩猟獣である。北海道にはこの時期の貝塚が本州よりも少なく調査例も少ない。早期末、前期初頭頃の貝塚例で、釧路市東釧路貝塚では別にのべる海獣類の出土に比べて著しく少なかった。前期の円筒下層式期、中期の北筒文化期においても海獣類に比べてシカは少ない。しかし、後・晩期にかけては次第に増加する傾向がある。島牧村栄磯岩陰では、シカの出土する後期以後と、極めて少ない中期の貝層があり、銛頭や釣針などの骨角製品にも材料の違いとなって現われた。すなわち中期の時期には鹿角製品が少なく、後・晩期には逆に多くなることが認められる。主体的な開窩式銛頭Open soket harpoon head にも形態的な進歩をみる

ことができ、L字形に湾曲する北方文化特有の大型釣針の軸は鹿角によって最初につくられるが、これも縄文晩期に至ってのことである。

〔イノシシ科〕Suidae　**イノシシ**　Sus scrofa

北海道に当時イノシシの棲息していた証拠はない。しかし道南の後期以降の貝塚から歯牙、骨格が出土する。蛇田町入江貝塚の後期初頭期に少数みられ、乙部町三ツ谷貝塚の晩期に伴う例、千歳市美沢川流域遺跡群中の呑口遺跡で歯牙を主とした出土があり、最近では貝塚でなく普通の遺跡においても焼骨片の中にイノシシの指趾骨の一部が残り、その在存が確められている。

本州にあってはイノシシとシカが狩猟獣の中心であるが、イノシシへの関心は縄文晩期において特に強い。イノシシの生息しない北海道においても晩期において本州との交流かいっそうさかんになると、イノシシを運ぶ機会も増えたはずである。生後半年から1年程の個体が本州でも捕獲される率が高く、従って北海道に運ばれる率も高くなったと思われる。しかし幼獣の目立つのは道南部のみで、道央の千歳市の見沢川上流に当る呑口遺跡で出土したイノシシは大部分がM3の萌出する直前から萌出後年月を経た個体のものであった。四肢骨の少ないことも考え併せて、報告者ものべているように歯牙の利用も含めて、特別の目的から少しづつ運ばれたのであろう。

食肉目　Carnivora

〔クマ科〕Ursidae　**エゾヒグマ**　Ursus arctos yesonensis

縄文中期の常呂町常呂朝日貝塚にやや目立つことが報告されているが、詳細を調査する必要がある。普通には少ないらしい。晩期の千歳市ママチ遺跡などでも大量のシカの焼骨中に僅かにクマの骨があった。犬歯の穿孔垂飾品なども稀である。続縄文期になって室蘭市本輪西貝塚に多いことが報告されている。本輪西資料は、例えばL$\bar{C}$：9、R$\bar{C}$：8、L$\bar{C}$：5、R$\bar{C}$：8といった数で、常呂例よりもはるかに多い。他に顎骨、四肢骨が多く出土しているという。おそらくオホーツク期を除いて多い出土といえよう。頭蓋や四肢骨も多かったという。

続縄文文化つまり恵山文化については海獣猟文化を主体的に考えられがちであるが、こうしたクマの出土は陸棲獣に対する狩猟活動も積極的であったことを予測させるのに充分である。

〔イヌ科〕Canidae　**エゾオオカミ**　Canis lupus hattai

オオカミの出土は稀である。縄文前期の例としては東釧路貝塚で乳臼歯を残植する下顎骨が出土している。また最近苫小牧市植苗貝塚から約1個体分が出土した。埋存状況の詳細を知り得ないのが残念であるが、これも殆んど稀有の出土例である。

イヌ　Canis familiaris

北海道ではまだ縄文時代の良好なイヌの遺骸を得ていない。下顎骨など断片的な資料なのである。畠山三郎太は網走天都山遺跡（早期）より犬の頭骨の単独出土例を調査し、当該時期のものとして詳述している。それによると最大頭蓋長180.0±㎜、下顎骨全長131.8㎜、本邦の石器時代犬としては類例の少ない中型犬に属するものであった。縄文期のイヌの出土例が北海道では少な

いが、本州のイヌと大差がないらしいというのが現在の知見である。

エゾタヌキ　Nyctereutes procyonoides albus

キタキツネ　Vulpus vulpus schrencki

本州の縄文時代貝塚などとほぼ似た出土状況を示すが、北海道ではタヌキよりもキツネの方が多く出土する傾向がある。先述の本輪西でも１個の上顎骨片を得ているのみである。

〔イタチ科〕Mustelidae　**カワウソ**　Lutra lutra whiteleyi

島牧村栄磯岩陰出土の下顎骨体には縄文晩期大洞Ｂ期の玉抱き三叉文が彫刻されていた。全面に彩色されていたもので、極めて珍しい加工品である。アイヌにはカワウソを神の使いとする説話がある。つまりシャマンである。縄文期にこれを身につけた人も単なる装飾的な目的ではなかったろう。

続縄文期豊浦町礼文華から下顎枝に穿孔、垂飾品としている例かある（本州の石川県上山田貝塚<縄文中期>に同例出土）。

海棲獣類　Sea Mammals

ヒゲ鯨類　Mystaceceti　　歯鯨亜目　Odontoceti

〔マイルカ科〕Delphinidae　**カマイルカ**　Lagenorhyncus obliquidens

〔ネズミイルカ科〕Phocaenidae　**イシイルカ**　Phocaena dallii

〔ゴンドウクジラ科〕Globice phalidae　**サカマタ**　Orcinus orca

イルカ類は東釧路貝塚、蛇田町入江貝塚に多く、前者にイシイルカ、後者にカマイルカが多く認められた。東釧路例では特に多く、頭蓋の吻端を内側に向けて放射状に配列、あるいは外側の方向に吻端を向けて置くなど特別の配慮のもとに並べられ、そこに儀礼が何らかの形で行われたことを示していた。サカマタの出土は稀であるが、入江貝塚より出土している。

鰭脚類　Pinniped

〔アシカ科〕Otarihde　**トド**　Eumetopias jubata

アシカ　Zalophus sp.

オットセイ　Callorhinus ursinus

アシカはかって本邦近海に多棲したニホンアシカあるいはクロアシカといわれる種類である。東釧路貝塚ではこれの出土が多く、トドは幼獣もみられたが数は少ない。オットセイは雌と幼獣であった。オットセイの多いのは内浦湾岸の貝塚で、北黄金貝塚で多かったことは１９６９年の調査で筆者がはじめて確認している。それらがすべて雌獣や幼体であって、オットセイの回遊状況を熟知した上での立地であった。しかし、オットセイの多いのは、縄文前期であって、中・後期貝塚ではかえって少ない。このことは、出土する骨角器ー特に銛頭ーの量からも裏づけられる。縄文早期末葉あるいは前期初めに現われる海獣骨製の開窩式銛頭がこの内浦湾内で最もさかんにつくられるのは前期後葉の時期なのである。

〔アザラシ科〕Phocidae

縄文時代の貝塚でアザラシ類を多く出土する遺跡はない。これはアザラシ類の主たる回遊分布地域であるオホーツク海側に縄文人の海洋資源を求めた遺跡が少ないからであるが、単調なオホーツク海岸が生活立地上好適でなかったことも考えられる。もちろんそれ以降の時期の人々にとっても同じであって、縄文期、オホーツク文化期、擦文期それ以降の時期の遺跡が限られた場所に重なる傾向がここでもみられるのであるが、その場合でも海獣猟ー特にアザラシ猟ーへの積極さは縄文期には低かったとみざるを得ない。

鳥　綱　Aves

ペリカン目　Pelecaniformis

〔ウミウ科〕Phalacrocoracidae　**ウミウ**　Phalacrocorax capillatus

ヒメウ　P. pelagicus など

〔ウミスズメ科〕Alcidae　**ウミガラス**　Uria aalge

北海道に繁殖するこれらの鳥は岩礁の海岸に多い。外海性の貝塚にこれらの鳥をみるのは、近くに繁殖、営巣地があったからであろう。

ミズナギドリ目　Procellarliformes

〔アホウドリ科〕Diomedee　**アホウドリ**　Diomedea albatrus など

アホウドリの出土は多い

ワシタカ目　Falconiformes

〔ワシタカ科〕Accipitridae

オジロワシ Haliaeetus albicilla と思われる骨格の一個体分が蛇田町入江貝塚の後期の貝層より出土している。これには頭部と脚の爪の部分のみ欠けていたが、これは意味があることと思われる。残存していた中節骨の遠位端に擦り切ろうとした際についた鋭い切り傷があったがそれは爪の部分を切った痕跡である。頭蓋からは嘴の部分を切りとったかもしれない（後述の青森県の縄文期にその例がある）。いずれも呪術的な意味の濃いものであったろう。苫小牧市植苗貝塚では、中足骨と趾骨が揃って出土している。

爬虫綱　Reptilia

カメ目　Chelonia

〔ウミガメ科〕Chelonidae　**オサガメ**　Dermochelys coriacea

北海道の縄文期貝塚で特にウミガメの多く出土した例はないが、オサガメが入江貝塚、千歳市美沢川流域の美沢第4遺跡（縄文前期）で出土している。オサガメは最大のウミガメである。熱帯から温帯に分布するが北海道近海での捕獲例もある。貝塚からの出土例は、当時かなりの数の回遊が北海道にまでみられたからであろう。

II　北海道・オホーツク、擦文文化期

脊椎動物　Vertebrata　哺乳綱　Mamalia

陸棲獣類　Land Mammals

エゾシカ　エゾヒグマ

オホーツク文化期の人々によって捕獲されたこれらの大型獣の骨は、縄文文化期のそれに比べてはるかに多い。特に頭蓋は竪穴の一画に集積され、頭蓋崇拝のあったことが推測される。

網走市モヨロ貝塚では、こうした状況を知る好例が知られている。竪穴の西北壁近くに９個のクマの頭蓋が東向きに並べられ、７個は頭骨が上に重ねられていた。別に炉の西北にもクマやシカ、海獣類の頭蓋が積まれていた。そして、これら頭骨と対称の位置に数個の自然石をすえ、なかにクマの四肢骨が積まれていたという（７号竪穴）。これらの骨は写真でみる限り成獣のものが多く、シカも成獣の雄で、角は角坐骨の基部から切断されていた。

オホーツク文化期住居址内の骨集積は根室弁天島遺跡でも知られており、ここでもクマとシカがあったが頭蓋の保存がよかったのはシカだけであった。雄が大部分であるらしく、角は角坐骨のところで切断されていた。

根室ではオンネモト遺跡が調査され、住居址およびそれをおおう貝塚が調査された。住居址内にはヒグマの頭蓋、下顎骨、下肢骨を主とするブロックとクジラ類、ゴマフアザラシ（主体）、トド、アシカそれにシカ、キツネ、鳥・魚骨を加えたブロックが４ケ所くらいあった。

こうしたオホーツク文化期の骨集積の実体が明らかにされたのは、１９７２年の常呂遺跡栄浦第二遺跡における５基の竪穴の動物群調査の報告からである。出土した骨類のすべてが採取され、それらは地点毎に整理され、その動物骨の内容、構成が明らかにされた。ただこの時にも筆者が骨を検したのは発掘後であって、そのために骨の二次的な破損、あるいは出土の現状のままを記録するに至らなかったことは残念であった。そのような欠点を除いては、おおよその様相を知り得たのである。

次のような状況の骨塚がみられた。

１クマの頭骨群（これに中小獣類の頭骨も少量伴う）。

２クマの頭骨群と同肢骨群（同じ竪穴内で分けて置かれていた）。

３クマ、シカおよび中小獣類の頭骨群よりなる。

４シカの頭骨群（これはクマの肢骨群が伴った）。

これらの動物のなかで特にクマについてはその年令構成・性別などに興味が持たれるが、これについては別表を参照されたい。次に骨集積内での獣骨について簡単に説明しておく。

７号竪穴でみられる頭骨群

確認された８個体分の上顎骨でＭ２に顕著な咬耗のみられるのは２個体で、その他はごく軽度のものであった。四肢骨でも、例えば７例の大腿骨中６例は遠近位両骨端のはずれた骨であり、

そのうち4例は小さい幼獣であった。

次にシカについてであるが、7号竪穴で10～11くらいの雄頭蓋と3個の雌頭蓋があった。雄の頭蓋には角を切断した痕がみられ、その切断状況は、根室弁天島遺跡出土の頭蓋にみるように角坐骨のかなり下で切断している。また、脳髄の摘出は半数のものにみられ、そのための頭蓋

第1表　香深井A遺跡出土ヒグマの年令および死亡時期

資料番号	用いた方法とそれぞれの結果										結論		
	歯牙の状態		下顎骨のX線および染色像		犬歯X線像		犬歯染色像		第1後臼歯X線像		第1後臼歯染色像				
	年令	死亡時期	年令	死亡時期	年令	死亡時期	年令	死亡時期	年令	死亡時期	年令	死亡時期	年令	性別	死亡時期
1	0	夏～秋											0	♀?	夏～秋
2	0	秋～冬	0	夏～秋									0	♂?	秋
3	0	〃	0	夏～秋									0	♂?	秋
4	0	〃											0	♀?	秋
5	0	〃	0	秋?									0	♂	秋
6	0	〃	0	秋									0	♀?	秋
7	0	〃											0	♂?	秋
8	1?	夏?	1?	夏～秋									1?	♀	夏～秋?
9					3		3	春					3	♂	春
10					3		?						3	♂	春
11					2								2	♀	春
12			2?	夏?	2	春?			2	春?			2	♂	春?
13									2	春～夏	2?		2	?	春～夏
14					7～8	春	8	春					8	♀	春
15					6?	?	7	春?					7	♀	春?
16									3～4	春	3?		3?	♀?	春
17					8	春			8	春～夏			8	♂	春
18									5～7	冬～春			5～7	♂?	春?
19					10?	春～夏	10	春					10	♀	春
20									5	春	?		5	♂?	春
21					6?	春	5～6	春	6	春			6	♂	春
22					20＋α	春	?						20＋α	♂	春
23					20＋α	春	20＋α	春					20＋α	♂	春

注　?は推定が不確実なことを示す。5～7等は、年輪が不鮮明で、5才・6才・7才のいずれかであることを示す。

切断あるいは一部の破壊などがみられた。成獣と若獣（Ｍ２の完全萌出以前の段階までのものも含む）との比は８：５くらいであった。

その他の小型獣ではタヌキが主体で頭骨も多く、併せて四肢骨も多かった。

８号竪穴でのクマの頭骨の集積は最も典型的なもので１４ないし１６個の頭骨があった（これも発掘時には確認できなかった）。頭骨は２ないし３個が重なっている状況がよくみられた。しかも、頭骨は単に山積みにするというのではなく、中心を決めて、そこへ向けて放射状の配列をしたようである。ただし、置いた場所は奥行きのあったところではないから、どうしても左右にひろがるような形になったようである。

４号竪穴東壁中央の中小獣頭骨の集積

エゾウサギ：１個体分

エゾタヌキ：頭骨３、側頭部左に穿孔されていたのは２個

カワウソ　：頭骨１、側頭部右に穿孔

オットセイ、アザラシは下顎骨のみで、それぞれ１および５個

キタキツネ：頭骨３、側頭部左右に穿孔

クロテン　：頭骨８、側頭部両側あるいは片側より穿孔したもの

以上が特殊な骨集積の状況である。いわゆる骨集積場はこうした動物種の骨が主体になったはずであるが、なおこの他に鳥類、魚類の種々な部位が伴出しており、同様の意図があったものと思われる。

〔イヌ科〕Canidae　イヌ　Canis familaris

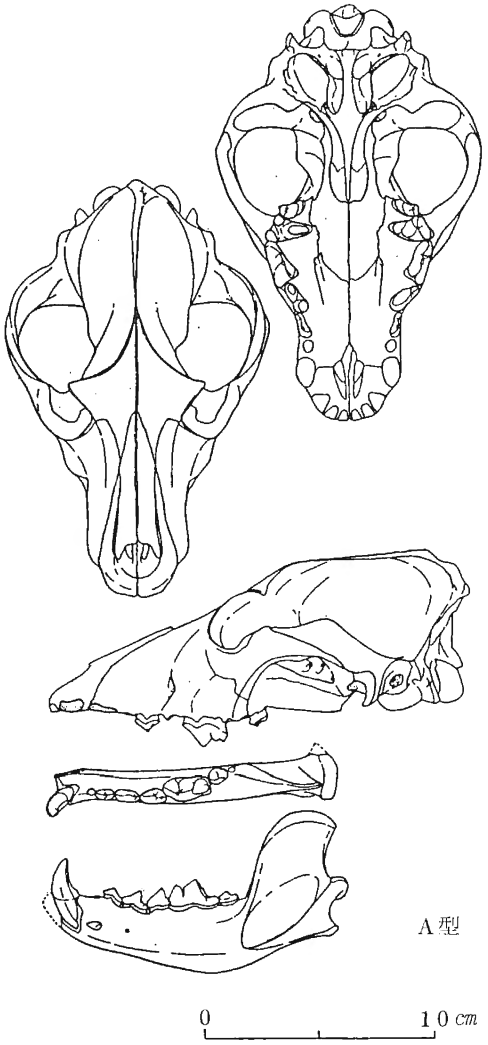
オホーツク文化期の遺跡からはイヌの遺骸が多数出土することが知られている。網走市モヨロ貝塚からイヌの頭蓋約３００個を採集したと故児玉作左衛門氏は記されており、近年の学術調査であった礼文島香深井Ａ遺跡においても、重復する数個の竪穴をおおう貝層からの出土であったが、推計最少個体数３３０個体を出土している。しかしどの遺跡の場合でも同様の出土状況を示すとは限らず、クマ、シカ、海獣類を主としたいわゆる骨塚には、イヌを殆んど含まないような例（常呂栄浦第二遺跡）もあり、その扱い方に違いのあることが認められるのである。

さて、オホーツク文化期のイヌの形質について、まとまった見解を示されているのは、直良信夫、高橋多蔵の両氏である。直良は下顎骨の形質をもとに、Ａ・Ｂ２型に分け、Ａ型を大型で、骨体は重厚で、前臼歯列から後臼歯列にかけての骨体下底縁が非常な丸みをもって強く膨出しているもの、Ｂ型は、やはり一般に大型であるが、Ａほど骨体は重厚ではなく、またＡ型のような骨体下底縁の強い膨出がみられないものである。また高橋はカラフトの貝塚出土の家犬の頭蓋骨を大きさに従って３型に分類している。

先述の礼文島香深井Ａ遺跡出土のイヌの頭蓋を形質によって大別すると、吻部の巾が広く頑丈なもの（Ａタイプ）、巾の比較的細いもの（Ｂタイプ）に分けられる。頭骨と下顎の共伴する資

料によって、頭蓋と下顎骨との形質関係をみると、Aタイプの頭蓋にA型の下顎骨が、Bタイプの頭蓋にB型の下顎骨が伴うようである。ただ直良の示したA型の下顎骨と同程度に下顎底の膨隆した資料は少なく、A～B型の中間的な形のようである。一方、直良のいう下顎骨B型は、香深井A遺跡のBタイプの頭蓋に伴うものに近似するようである。香深井A遺跡では、Aタイプの吻部をもつ頭蓋が多く、またA、B両タイプ、中間的なものもやはりかなりみられた。

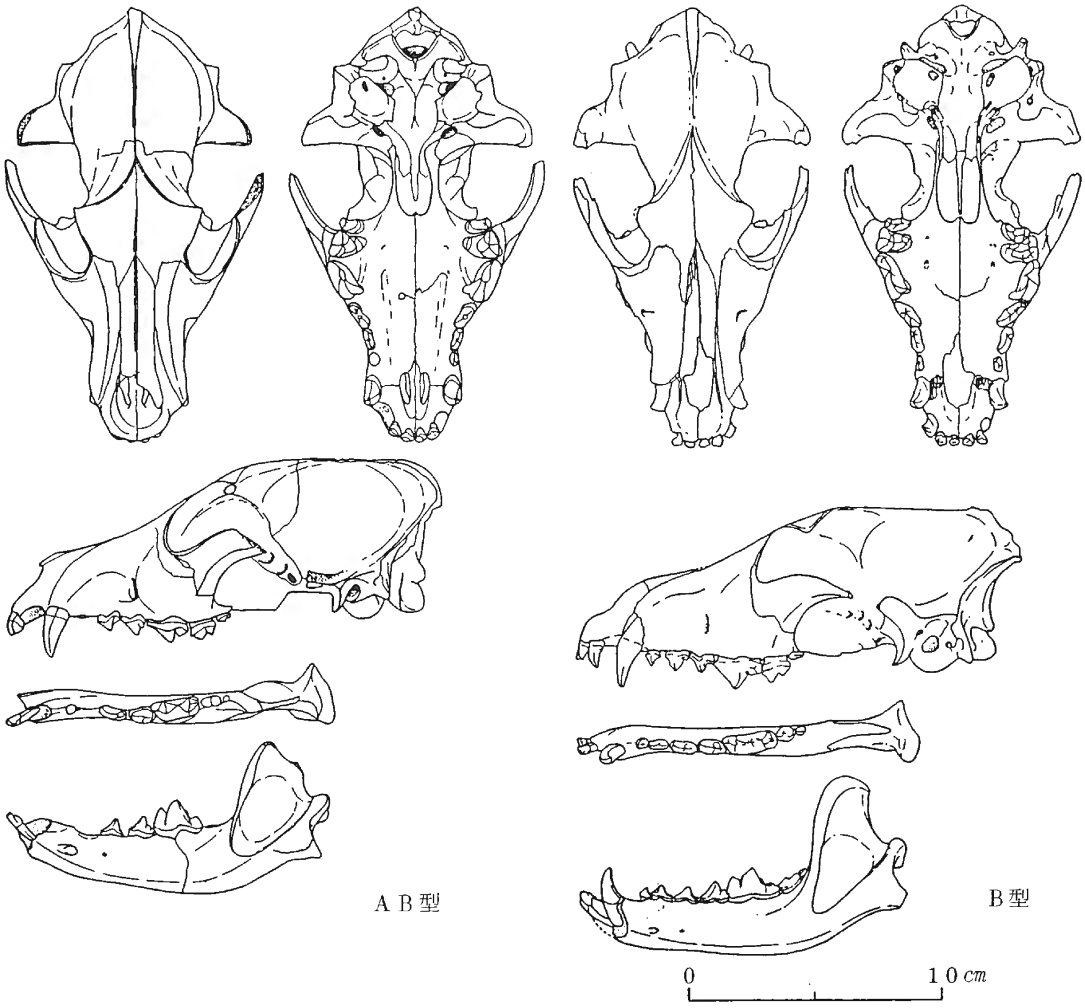
以上にみた形質では、AおよびAB中間のタイプはオホーツク文化期以前の縄文期にはみないものであり、これに対して、Bタイプの頭蓋は、北海道、本州あるいは沿海州など東アジアの諸地域で知られるものなのである。Aタイプのものがアラスカ地方の貝塚に知られることは報告されているが、その分布や系統については問題が残される。おそらく、オホーツク海からアリューシャン列島の海岸地域で飼育された一種であったのであろう。



第1図　礼文島香深井A遺跡
（オホーツク文化期）
出土のイヌの頭蓋骨・下顎骨(1)

オホーツク文化期のイヌについては、以上に述べた形質的特徴の他に、その飼育、利用の方法にも注目される点がある。先に述べた香深井A遺跡での330頭に達する遺体で、全身の骨格がそろって出土した例は1頭もなく、散乱した状態で出土するのが常であった。頭骨のみの出土、上肢あるいは下肢のみが2個体分以上まとまって出土した例、椎体列1個体分がつながって出土する例などは、イヌを様々な方法で解体処理したことを示していた。その上、下顎骨の歯牙の萌出状態および磨耗状態をみると、老獣段階のものはなく、2・3才以前に死亡している例が多いのである。これらの事例は、飼育されたイヌが食用となったことを示すものであり、それに伴う宗教的な儀礼が様々な形であったことを推測させるのに充分である。

オホーツク文化期においてイヌの特殊な利用のあったことは、直良信夫がオホーツク海沿岸遺跡の家犬骨をつぶさに検した際、その角状突起部分に人為的な破損のあることを発見して、これが屠殺、解体を示す一例であると説明しているのがはじめてである。



第２図　礼文島香深井Ａ遺跡（オホーツク文化期）出土のイヌの頭蓋骨・下顎骨(2)

その後１９６９年の香深井Ａ遺跡の第２次調査時であったが、その際、先述したイヌの特異な出土状況を金子は認識し、その注目すべきことを指摘したのであった。本州における縄文文化期のイヌの埋葬諸例の多くをみてきた者にとっては極めて異質な様相であった。

キタキツネ　　**エゾダヌキ**

〔イタチ科〕Muslelidae　**クロテン**　Martes zibellina

キエリテン　Charronia feavigula

カワウソ

これらは先に述べた骨集積場所に集められ、独立したブロックを作るようである。これとは別に貝塚や骨塚といえる貝や魚骨を主体としたような集積場所からも出土し、キツネ、タヌキが中

小獣の主体となる。椎内オンコロマナイ貝塚ではキツネが多く、常呂栄浦ではタヌキが主体を占めていた。テンもこれらに次いで多い。ただしキエリテンはオンコロマナイ貝塚の出土でこれは大陸からの移入品である。

海棲獣類

本邦の海岸遺跡からは鯨類、鰭脚類の遺骸が少なからず出土することはすでに述べたが、北海道におけるオホーツク文化期の遺跡からも豊富に出土し、かつその内容は、縄文文化あるいはそれ以降のものとまた異なるものをもつ。一つにはオホーツク海という自然を背景としての狩猟活動の所産であるが、文化的、技術的な面との関連も深い。そこで特にここに一項をもうけて述べておく。

オホーツク文化の遺跡から出土する海獣類遺体は、アシカ科、アザラシ科、クジラ目各種にのぼるが、遺跡による出土の内容も一様ではなく、例えば道北部ではアシカ科のオットセイとクジラ目が多く、道東部ではオットセイの出土もみるが、アザラシ科各種の出土が少なくない。

道北部の礼文島香深井A遺跡では、海獣類各種の推計個体数、アシカ科トド６１、オットセイ３７６、アシカ類１５、アザラシ科１１４個体であった。

アザラシ科各種についての骨格全体からの調査はなお終了していないが、出土量の多かったのはゴマフアザラシ、フイリアザラシであって、アゴヒゲアザラシ、クラカケアザラシは少なかった。最も数の多かったオットセイは、その約３／４は雄獣で、その半数以上はテリトリーブルといわれる１０才以上になる大型の雄獣であった。雌は約６０％は成獣であった。成獣以外の若獣においても、１才未満であるような幼獣個体は雌雄ともに極めて少なかった。以上のような年令、性構成は、海獣狩猟の際の撰択というよりも、礼文島がオットセイの回遊コースであること、また、この島の近海が雄の成獣の秋から春に至る期間の分布域にあたったであろうと推定されることなどから、既述したような成獣雄を主とする捕猟がみられる結果となったと思われる。

次に道東地域についてみると、例えば根室市オンネモト遺跡では最多数出土はオットセイであるが、それはむしろ雌成獣幼獣を主として雄成獣は少ない。これはこの海域に南下回遊するオットセイが雌や幼・若獣を主体としていることと明らかに関係する。

アザラシ類ではゴマフアザラシ、アゴヒゲアザラシ、クラカケアザラシ、フイリアザラシ、ゼニガタアザラシの５種類がみられ、ゴマフアザラシが主体であるが、根室から千島列島に主とした分布をもつゼニガタアザラシの多かったことは、地域的特徴をよく示すものであったといえよう。

クジラ類について次に全般的に述べる。オホーツク文化の遺跡から出土する骨は少なくないが、個体数としては、鰭脚類よりもはるかに少ないのであろう。その中で、道北の遺跡では比較的多く、香深井A遺跡ではイルカを含めて１１種が同定され、推計最少個体数は６１個体となった。このうち重要なものをあげるとすれば、大型のクジラとしてセミクジラEubalaena glacia-

lis ザトウクジラMegaptera novaeangliae、マツコウクジラ Physeter catodon。小型のクジラではゴンドウクジラ Globicephala melaena、カマイルカ Lagenorhynchus obliguidens、イシイルカ Phocoenoides dalli が多い。そして小型のクジラ類では、いわゆる骨塚に頭蓋骨を含む全身骨格が出土しているのである。なお、この香深井A遺跡では、ゴンドウクジラを含む多くの動物骨を集めた集石が検出されている。それは礼文島という島ならではの様相であった。

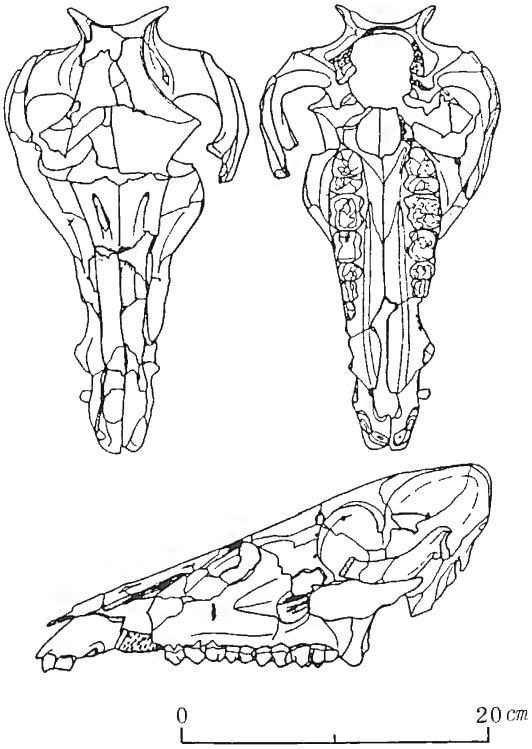
擦文期の例であるが、アシカの頭骨7個以上が奥尻島青苗貝塚から出土しており形態学的な研究が行なわれている。筆者らが発掘した1976年にもアシカの骨が大量に出土しており、季節的な狩猟が行なわれたことを推測させた。

〔イタチ科〕Mustelidae

ラッコ Enhydra lutris の出土が近年注目されている。すべて続縄文期、オホーツク文化期のものであるが、太平洋岸と内浦湾東湾域にまでみられる。かって本邦近海に棲息することがあったらしい。

〔イノシシ科〕Suida　**カラフトブタ**　Sus inoi

カラフトおよび北海道のオホーツク文化期の遺跡から特殊なイノシシ類の遺骸の出土することは、この文化期の遺物を早く注目された稲生典太郎氏によって指摘された。氏が採集された遺骸を検討したのは直良信夫であったが、直良はこのカラフトの貝塚産のイノシシ類に対してその形質的特徴から飼養された家畜ブタであることを認め、カラフトブタ（Sus inoi）と命名した。直良は、それらのブタの形質が、中国の東北部、朝鮮地方でみる黒毛の半野生ブタの形質とよく似ていることから、これらのブタは樺太貝塚人がアムールランドを経て移入されたものであり、移入後独特の発達をとげたものと考えた。



第3図　カラフトブタの頭蓋骨・下顎骨

第2次大戦後、北海道内のオホーツク文化の研究が進み、特に近年、北海道北部の遺跡、礼文島香深井A遺跡、利尻島マタワッカ貝塚等よりかなり多くの遺体が発見されるに至

り、その形質あるいは年令構成などが明らかにされてきている。特に完全な頭蓋骨の出土によって、本種の形態的特徴がよく知られるようになった。それらの詳細についてはなお調査中であるが、形質の概要を記すと次の通りである。第3図に示した香深井A遺跡出土の雌の頭蓋についてのべる。

大きさはニホンイノシシよりも少し大きい程度である。左右の頬骨弓の形態が特徴的で、ニホンイノシシやウスリーイノシシでは、左右の頬骨弓がほぼ平行するが、カラフトブタでは外側に強く張り出して、頭蓋の巾を広くし、丸味の強い頭蓋の形をつくっている。また涙骨から上顎骨にかけての傾斜はゆるくなり、上顎骨後部外側への張り出しも強くなっている。歯牙はニホンイノシシより大きい。側面観にみる前頭骨から後頭部に至る頭蓋上面は、野生イノシシにみるように殆んど直線的である。

次に遺跡における出土内容について述べると、マタワッカ貝塚では上、下顎骨の殆んどが幼・若獣であり、その中でもM3の萌出の不完全なものが多い。香深井A遺跡では推計最少個体数84個体という多数が出土している。それには幼・若、成、老の各年令の個体が含まれていることから、繁殖集団として飼養されていたことが予測される。島という特殊な環境下での人々の生活維持にあって、こうした飼育動物が重要な役割を果したであろうことは想像に難くない。

ところで、このようなカラフトブタの遺骸は北海道本島においても各地の遺跡に残されている。その出土量は極めて少なくなると思われ、礼文、利尻島に最も近い椎内市オンコロマナイ遺跡では、出土したものは20片あまりの四肢骨片であり、さらにオホーツク海岸を東する道東の常呂、網走、根室地方の遺跡においては、一調査で数個の骨片を得るにとどまる。そこでは既に飼育の面影はみられないのである。

鳥　綱　Aves

この時期の遺跡にみる鳥骨の出土は極めて多くまた種類も多い。鳥骨についての研究は充分とはいい難いが、例えば椎内オンコロマナイ貝塚では少なくとも20種類におよぶ種類が含まれ、礼文島香深井A遺跡でも16種以上あったと考えられるにおよんだ。

〔ウ科　Phalacrocoracidal　ウミスズメ科　Alcidae　アホウドリ科　Diomedeidae　アビ科　Gaviidae、カモメ科　Laridae　ミズナギドリ科　Puffinidae、カンガモ科　Anatidae　ワシタカ科　Aecipitridae　〕

ウの類が40％を占め、アホウドリ類が20％、ウミガラス類が10％弱というのがオンコロマナイ貝塚での様相であったが、おそらく他のオホーツク関係の遺跡でも近似した内容であると思われる。これらの鳥は肉はもちろんであるが、羽毛、卵なども生活の資源として重要であった。味においてけっして美味とはいい難いものであるが、すこぶる大量に捕獲しているのである。

このことは前にも述べたが、この地域で鳥骨の出土が多いことは、北海道に繁殖する種類を含むこと、豊富な魚に集まる海鳥であること、遺跡や貝塚の立地がこうした海岸あるいは海崖に近

いことなどがあげられるだろう。

Ⅲ　本州・四国・九州およびその周辺の島々

脊椎動物　Vertebrate

陸棲動物

偶蹄目　Artiodactyla

〔シカ科〕Cervidae　**ニホンジカ**　Cervus nippon

〔イノシシ科〕Suidae　**イノシシ**　Sus scrofa

リュウキュウイノシシ　S.S. riukiuanus

オオツノジカ　Megalocerros　が更新世以後、最新世になっても生存したという説もあるが明瞭な遺跡からの出土例で確認されたことはない。またノロ　Capreolus capreolusの角が福島県いわき地方の貝塚で表面採集されているが、これも当時のものと確認されていない。

上記の二種を除いて本州以南の縄文期以降日本列島では（沖縄諸島ではイノシシに限られるが）をニホンジカとイノシシの二種が当時の人々の生活に大きな関わりをもってきた。今日遺存するものとして骨角、歯牙をみるが、注目されるのは骨角、歯牙を材料としてつくられた道具であって、これら製品の殆んどがこの２種の動物から得ているのである。もちろん、利用し得る部位は限られ、使用目的によく適した製作法あるいは加工技術が考えられている。

シカおよびイノシシを大型陸棲動物の代表とする動物相は愛媛県上黒岩第９層にみられるように、日本における土器製作技術の出現当初において既にみられていたものである。土器の出現があるいはそれよりさらに古く遡ると考えられるが、その時期での代表的な動物相を充分知るに至っていない。考古学的な遺物と伴出する良好な動物遺体が知られていないからである。

縄文時代の両種は現生種に比べて一般に大きく、島嶼型の沖縄諸島のリュウキュウイノシシを別にして、九州地方の貝塚産種はやや小さく、関東、東北地方産のもの程大きくなる。現在イノシシ、シカの生息をみない佐渡、伊豆諸島などの島嶼からも、貝塚その他の遺跡からの出土例がある。

日本列島の島嶼においては特殊な型のイノシシ、シカが知られており、遺跡からも出土する。先に述べたリュウキュウイノシシは早期以降多量に出土し、薩南諸島にもこれに近似する大きさのイノシシの骨が出土する。しかし、リュウキュウイノシシとの関係はまだ明らかにされていない。対馬、壱岐にもイノシシ、シカが出土するが、近年行なわれた対馬佐賀貝塚(縄文後期)の所見によると圧倒的に多いのがイノシシであって、シカは極めて少なく、現生するツシマジカなどとの関係は不明である。

佐渡島にも古くイノシシが棲息したらしいが、縄文後期頃はシカは既に生息を絶っている。伊

第２表　各地イノシシ科獣類の頭骨計測表

	細浦 №1(♂)	細浦 №2(♀)	細浦 №3(♀)	飛騨地方現生種 Hida)♂	秩父地方現生種 chichibu)♂	礼文島イノブタ isl Rebun)	アムールイノシシ♂
頭骨全長	405			355	308	308	451～301
頬骨幅	158	140	143	142	120	156	171～120
中央前頭幅		189	171	177	160	152	
前頭最大幅	1.16	102	1·02	104	95	99.4	
B／L	39.0			40.0		50.7	
B／C		74.1	83.6	80.2	75.0	97.4	
D／C		54.0	59.6	58.8	59.4	65.3	

※細浦：岩手県大船渡市細浦貝塚

豆諸島においては最近の調査で興味深い事実が知られている。早期から伊豆大島では出土し、八丈島にも前期には出土する。そして新島、大島での後・晩期の出土、三宅島での弥生期の例というように、イノシシの遺骸の出土が知られる。しかし、シカは全く生息した証拠はない。伊豆諸島のイノシシは明らかに島嶼型のものであるが、本土産のものとどのような関係があるか人間との関係とともに興味深い問題である。

ブタとして認められるのは先にあげた北方オホーツク文化にみる他に古い例はない。沖縄本島の例で近世の墓（古我知遺跡）から出土したのは現生リュウキュウイノシシよりもやや大きく、頭幅のやや広い形態のものであった。

近世の例で長崎市出島オランダ商館跡からの出土例は、オランダ人が持ってきた頭骨全長約３６０㎜の大型のブタであった。

縄文～弥生期の遺跡から知られるシカ、イノシシには雌雄、幼・若・老の諸年令段階のものがみられる。シカでは頭蓋にみる限り雄獣が多く、角を付けていたものが多い。シカの雌雄の区別については形態差から一つ一つの標本でみることが試みられているが、破損標本が多く、査定できる標本は限られる。

性別・令査定・死亡季節査定については、大泰司紀之によるシカ下顎骨による方法が１９８０年に開発され、そして、それに基付いた遺跡出土のシカ下顎骨の調査が行われている。その成果の一部に、縄文遺跡から出土するシカに若年令層の目立つことから、これを狩猟圧とみる見方と必ずしもそれと決めつけることはできないとする考えが対立している。結論をいそぐより各地の

遺跡での在り方をきめ細かく考えてゆく立場を筆者はとりたいと思う。遺跡からの主要骨の出土が時期的にどのように変っているのかということをもっと丹念に調べる必要があろう。調べた筆者の研究もそうした立場にあるからである。

イノシシでは、雌雄の区別が犬歯、顎骨などでかなり容易であり、雌雄ともに捕獲対象となり、雌が主体的に捕獲されている例もある。シカとちがって、幼年段階（M１萌出以前の乳歯のみの段階で生後１３週位まで）のものが時々みられ、次いでM１萌出の生後６ケ月、以下M２萌出期、M３萌出期のものが出土する。全部の永久歯の揃うのは３年以上経たものであり、量的にこうした成獣骨が多い。

弥生時代においても、イノシシ、シカの骨の出土は多く、性別、年令構成など類似する。ただ弥生時代の獣骨についてその内容が詳しく報告された例はまだごく少ない。そのなかで、大阪府池上遺跡出土（弥生中期）のイノシシ類は特徴的で、M１の未萌出段階顎骨が２３.３％、M３が未萌出途次か僅かに磨耗する段階（２年未満）５３.３％であった。縄文期の場合（関東地方の晩期例でみた）、M１未萌出顎骨は8.2％、その次のM３の萌出途次か僅かな磨耗段階のものが３０.３％であった。池上遺跡でM１の未萌出段階の個体の多いことが注目された。また、イノシシとシカを比べるとイノシシが６０個体に対して、シカは８個体である。イノシシを主体とする傾向が奈良盆地の縄文後・晩期から弥生期にみられるが、池上遺跡の例は、さらにイノシシに片寄った出土であった。このようなことから池上では一時的にイノシシの飼育が行われていたのではないかということを推定したのである。

なお、幼獣骨の出土例については、縄文時代貝塚において知られるような、cおよびdm4 の僅かな萌出を認める個体がある。これからは新生児もしくはそれより日時をさして経ていない個体のものである。イノシシの幼獣を手に入れることは決してできないことではなかったと思われる。縄文人はこうした幼獣を死後食べることなく、これを埋葬しているのである。カメに入れた確かな例もあり、１個体が全身骨格、若しくはそれに近い状態にある骨が出土することは、埋葬あるいはそれに似た行為のあったことを予測させるのに充分である。解体されていないことはおそらく食べていないであろう。食べていないのであれば、例えそれが一時期飼われたとしても家畜とは程遠く、全く違う意識であろう。山梨県金生遺跡の１１４個体のイノシシ幼獣下顎骨の出土も、雌雄両性があり、飼育を意識したものとは考え難い。イノシシのように幼獣の出土の殆んど無いシカではこうした出土例はない。イノシシは簡単に捕えることのできない獣ではあったが、人々に馴染み深い獣でもあり、それ故に、最近の愛知県伊川津貝塚（縄文晩期）出土のイノシシの調査では、新美倫子によると一年を通してとっていたことが証明されている。

リュウキュウイノシシ

沖縄本島具志頭村港川の崎浜採石場より多量のイノシシの化石が出土したことで、数万年前からこの地域にイノシシが棲息していたことが確認され、南西諸島の各地からも知られている。沖

縄本島、奄美大島、徳之島など縄文後期に至る貝塚、これ以後さらに新しい時期の石垣島、西表島の諸貝塚においても多くの骨が出土する。

沖縄本島、渡喜仁浜貝塚の１９７７年報告によると、下顎骨１０個が出土し、Ｍ２不完全萌出例、Ｍ３未萌出例各１個を除くと、すべて他はＭ３萌出あるいはさらに咬耗の進んだ段階のものであり、本州や九州本島におけるイノシシ遺体とさして違いのない在り方であったらしい。

１９８１年縄文早期の野国遺跡が調査され、イノシシの解体址が検出された。これは総個体数６６１という大量のもので、詳しい内容が報告されている。その中でイヌの遺骸が検出されていないことが注意される。これについては別の見地から調査する必要があろう。その後、波照間島の下田原貝塚（縄文晩期）からも多数の骨が出土し、ここでは0.5才から1.5才という個体が３２％であったが、本島の古我地遺跡も３３％であった。若い個体に対する扱い方の共通するのは、本島と島嶼とでイノシシへの対応に大きな差はなかったとみるべきなのであろう。

〔ウシ科〕Boyidal　**ニッポンカモシカ**　Capricornis crispis

平野部の貝塚などで知られることは殆んどなく、出土例は山間の洞穴や岩陰遺跡に限られる。筆者の調査し得た例では、新潟県室谷洞穴（縄文前期）、長野県唐沢岩陰（縄文晩期～弥生期）、長野県湯倉洞穴（弥生期）があり、他に長野県栃原洞穴（縄文早期）もその例といえよう。これらの洞穴で出土するカモシカはかなりの数であって、地形的な条件を巧みに利用して捕獲していたことが考えられる。なお、洞穴遺跡の形成は以上の例からも見られるように縄文早期から晩期、さらに弥生期に及び、そして、動物骨特に獣骨の出土は多い。唐沢洞穴は縄文晩期から弥生期、湯倉洞穴は草創期より晩期さらに弥生～古墳期に至る堆積層をもち、ここでもサル、クマ、イノシシ、シカ、カモシカなど多彩な獣骨が出土した。湯倉洞穴の最上層である古墳時代の層からは、他の遺跡では殆んどみることのないシカの新生児骨がかなりまとまってみられた。

大泰司紀之の教示によれば、当時シカの新生児あるいは生後間もない個体を専門にとる猟があったのではないかというのである。つまり、バンビの柔かい毛皮を目的とした猟である。このような猟が古墳時代になってみられるところに注目させられるのである。

最近注意している動物骨の出土の焼骨の問題がある。これについては早くに注目している考古学者もあり、類例が集められている。最近の群馬県千網谷戸、東京都なすな原遺跡などではこれまでにない多量の焼骨が出土し、前者が家屋火災時に焼けたものと考え、後者は儀礼的な意味が考えられることを出土の状態から推定している。先に述べた山梨県金生遺跡もまたその好例である。

ウシ　Bos taurus

縄文時代から弥生時代に至る間のウシの遺体の確かな出土例は今日なおごく限られる。特に縄文時代のこれまでの出土例は問題が残る。弥生時代の例でも、壱岐、原ノ辻遺跡（弥生中・後期）での下顎骨と肢骨片、長崎県福江島（五島列島）大浜貝塚から知られたウシの歯（加工した歯があ

るという。弥生中・後期）がある。上記の原ノ辻出土の骨は、仙波輝彦氏によれば4頭分があり、その大きさは日本の在来牛として知られる山口県萩市見島の見島牛と同じであったという。林田重幸氏による四肢骨（弥生時代２、土師期１、奈良時代１体）調査でも本邦古代牛の大きさが見島牛、琉球与那国牛、明治中葉の五島牛と大差がないという。

１９７８年東京都港区伊皿子遺跡で、弥生時代中期の方形周溝墓（宮ノ台期）の周溝上縁外側ぎりぎりの場所に牛の頭蓋が浅い凹みをつくって埋置したものが発見された。頭蓋は角を含む後頭部が切除され、左右の下顎骨がその上に重ね合わせるようにして置かれていたものであった。このような出土例はかって知られることはなく、それ自体きわめて意図的なものであったとみなければならないだろう。周溝外縁のきわにおくことも、周溝墓と何らかの関わりを考えさせるのに充分である。今後、同じような出土例によって、この時期の牛の存在が証明されることが望まれるのである。伊皿子の牛の歯牙計測値上からは、上記の例とほとんど変わりない。

１９８３年神奈川県横須賀市なたぎり遺跡で古墳時代貝塚の貝層直下にウシの頭骨が石囲いの中に仰向けにして出土し、その周りには大量の碗や坏があった。これも上記の牛に似た大きさであった。東京都練馬区貫井東遺跡では住居址床を堀り、数頭のウシが埋められていた。いずれも祭祀を思わせる意味のある出土状態であった。

中世沖縄の城郭であるグスクからは多量のウシが出土する。大きさは日本に知られる在来牛（国ノ島、見島牛）と現在の和牛との中間くらいである。九州からの搬入も充分考えられる。

寄蹄目　Perissodactyla

〔ウマ科〕Equidae　**ウマ**　Equus caballus

縄文時代から弥生時代にかけてのウマの存在も牛と同様に問題が残る。縄文時代の貝塚から出土したという馬歯もあるがなお問題である。愛知県熱田貝塚の出土品は、この時期特有の線刻の刻まれた中手骨であって、弥生時代のものとされている。壱岐、カラカミ、原ノ辻からは中足骨が出土していて、いずれも日本在来馬である木曽馬、トカラ馬などに近い大きさのもので、中型馬といわれている。縄文時代の馬について林田重幸は、鹿児島県出水貝塚縄文後期市来式期の貝層出土、千葉県銚子市余山貝塚（縄文後期）から得た資料についてふれ、これはさらに小さい小型馬であるとし、華南方面から伝来コースを想定する。中型馬については、これとは別の中央アジア、朝鮮半島経由で古墳時代になって渡来したと考えた。一方現生中・小型馬の遺伝的な近縁関係を区別することができないとする最近の研究があり、いわば中小型馬の二流渡来説に批判がでている。さらにまた考古資料からも、南西諸島の縄文時代にウマが飼育された証拠は今日のところない。ウマがさかんに飼われるようになるのは中世のグスク期に至ってからである。グスク出土のウマは現在の中型馬とほぼ同大である。

食肉目　Carnivora

〔クマ科〕Ursidae　**ツキノワグマ**　Selenarctos thibetanus

クマは先にカモシカの項で述べた山間部洞穴、岩陰遺跡で多く、カモシカと伴出することは狩猟条件に共通するところがあるからであろう。平野部の貝塚からはクマの犬歯あるいは指骨に穿孔した垂飾品が出土する。縄文早期から例があり、後・晩期に多い。これらはおそらく交易品として山間地域からもたらされたものなのであろう。なお貝塚の例として青森県むつ市最花貝塚（縄文中期末）では、頭蓋や四肢骨が出土する。下北半島の先端に近い位置にあり、８００ｍ以上の山塊の山麓という特別の環境によると考えられ、大型食肉獣でありながら捕獲例が多いのは、穴居、冬眠という特殊な生態があるからであり、利用価値が高かったからであろう。

〔イヌ科〕Conidae　**ホンドオオカミ**　Canis lupus hodophilax

貝塚あるいは洞穴などでのホンドオオカミの遺体は、同じ食肉獣のクマなどに比べて著しく少ない。捕獲条件の難しい獣であり、稀に捕獲されたのであろう。遺骸としても極めて限られ、貝塚などでの出土例も少ない。千葉県市原市西広貝塚の縄文晩期の骨の集積区より頭蓋底部のみが出土し、その他の骨は全く出土しなかった。歯牙や四肢骨がどのようにされたか全く不明であるが、そうした一部の骨も穿孔などされて用いられているところから、主要な骨はすべて再配分され遺跡には残らなかったと思われる。四国の高知県佐川の洞穴から出土した例が完全な頭をもつ殆んど唯一のものであろう。貝塚から出土するオオカミの遺体に頭蓋を伴わぬことは大きな支障であるが、やむを得ない。縄文時代のオオカミについてはかつて長谷部言人によって大小二型があり、大なる方はシベリアオオカミの系統を引くものといわれている。

〔イヌ科〕Canidae　**イヌ**　Canis familiaris

縄文期以降の遺跡でイヌの遺骸の出土する例は全国にみることができる。縄文早期の例は稀であるが、前期では神奈川県横浜市菊名貝塚の如き１０数個体分を出土した例もあるが後・晩期に至るほど埋存例は多くなる。

１９７９年宮城県教育委員会の調査した気仙沼市田柄貝塚は縄文後末期を主体とする貝塚で、発掘面積も広いこともあったが、２２個体の埋葬犬とその他散乱した骨を得ている。これについては、現代芝犬との比較も含めた詳しい研究報告がある。

遺跡からは遊離した下顎骨、四肢骨の出土する例も少くないが、埋葬と思われる１個体分の出土例も多い。それらはいずれも小ピットを掘って埋めている。普通ピットは小さく、体を曲げるようにして入れている。遊離した下顎骨や四肢骨も当初は埋葬されたものだったのであろう。極めて稀であるが、四肢の長骨の遠近位端に鋭い石器による擦り切り痕のある例もあり、それが解体の際についたものとすれば食用に当てられることもあったと思われる。しかし先に述べた北海道礼文島香深井Ａ遺跡（オホーツク文化期）の例でみたような解体を思わせる出土状況を本州以南の地で接する機会はない。

縄文時代のイヌは大部分が長谷部（１９５２五大別）による小型犬に属しており、中型犬は東北・北海道地方に分布する。石器時代犬の形質については長谷部言人・直良信夫・斉藤弘吉らに

よって研究され、現生する日本の在来犬である柴犬は、この縄文時代の小型犬から系統を引くものと考えられ、現在詳しい計測と形態学的研究が進められている。

日本犬の歴史は、このような石器時代犬を基幹としてはじまるが、やがて弥生時代から古墳時代になると縄文犬よりも大きいイヌが現われる。大陸からより大型のイヌが招来されたことも考えられるし、時代を追って大型犬指向も強まるのであろう。古代犬の性格が次第に変貌してゆくこれらの研究は今後の課題である。

弥生時代の近畿地方のイヌで頭骨全長１７５.０㎜という中型例があり（八尾市亀井遺跡）、奈良時代の例で２０１.０㎜というのがある（藤原京）。これ以後標本の多いのは１４～１５世紀位の鎌倉犬で、額段などに縄文犬の面影を残すが、頭骨全長は１６６～１８９.０㎜と変異の幅が広い。歯牙はその割に大きくなく、四肢骨は縄文犬に比べてきゃしゃで、明らかに生活とその環境の変化がみられるであろう。さらに近世犬には墓に埋葬された矮小犬を江戸の市街地にみる。

タヌキ　Nyctereutes procyonoides

キツネ　Vulpes vulpes

中型獣の代表であるが、出土量はタヌキの方がはるかに多い。一遺跡からの出土量はシカ、イノシシに及ばないが、中型獣としてはおそらく最も多い。タヌキの方が棲息数の多かったことも考えられるが、人里近くにも棲む生態的な条件によるのであろう。

〔イタチ科〕Mustelidae　**テン**　Martes melampus

アナグマ　Meles meles

カワウソ　Lutra lutra

テンにはかなり大型のキクナテン Martes kikunensis、アナグマにも１、２の亜種が考えられている。カワウソは遺跡からの出土例は決して多くないが、１、２点程度の骨出土例は稀ではない。当時は全国の海岸、河川で棲息していたものと思われる。

〔ネコ科〕Felidae　**ネコ**　Feliscatus

縄文・弥生時代にさかのぼる出土例はないと思う。中世鎌倉の遺跡には頭骨、四肢骨が出土、近世遺跡には多い（江戸の遺跡）。

オオヤマネコ　Lynx sp.

福井県鳥浜遺跡（縄文前期）ではじめて縄文時代の生息が確認されている。以後、北海道、本州、四国の遺跡から検出している。また自然洞穴からの出土もある。下顎骨に穿孔して垂飾としている例があり、歯や骨は多くそのように使われたのであろう。

ウサギ目　Lagomorpha

〔ウサギ科〕Leporidae　**ノウサギ**　Lepus brachyurus

アマミノクロウサギ　Pentalagus farnessi

アマミノクロウサギは日本の特産種で、奄美大島と徳之島だけにすむ。徳之島の太田布遺跡で

検出されている（縄文晩期から弥生期）。ノウサギは遺跡では一般的であるが、その割に多い出土ではない。むしろ早、前期の遺跡で目立つことがある。

齧歯目　Rodentia

〔リス科〕Sciuridae　**リス**　Sciurus lis

ムササビ　Petaurista leucogenys

平野地帯の貝塚で出土するこれらの小・中型獣の数は多くはないが、ウサギなどに比べるとムササビの方が多い。樹上棲であるということが、その居場所をつきとめ、狙いやすいということがあったのであろう。リス、ムササビの多いのは東北の貝塚である。

〔ネズミ科〕Muridae

ネズミ類は出土の標本としてはまぎらわしいものである。後世の混入も考えられるからである。しかしピット内の貝層などに封じ込められたような出土の場合は間違いないのであろう。埼玉県川口市ト伝遺跡のフラスコ状ピットよりアカネズミ Apodemus apeciosus の骨格が多数検出され、千葉県市原市祇園原でも同じ例があった。小型のノネズミの混じる例が多い。宮城県気仙沼田柄貝塚でも多くの骨を検出し、食用として重要視している。

霊長目　Primates

〔オナガザル科〕Cercopithecidae　**ニホンザル**　Macaca fuscata

東北地方の下北半島北部の貝塚、北上山地帯の洞穴、関東平野の下総丘陵と武蔵野台地南部の貝塚、中部山地帯の洞穴、岩陰遺跡などが東日本でサルの骨が出土することで知られている。西日本においても出土例はあるが、東日本の遺跡ほど多く出土している例はないのではなかろうか。最近の調査では福井県鳥浜貝塚（縄文前期）で１５点の下顎骨、四肢骨が出土している。

石器時代のサルの狩猟技術上の問題として、捕獲されたサルの性・年令別が意味がありそうである。神奈川県横浜市称名寺Ｄ地点貝塚からは３０m^2位の発掘域で９個のサルの上、下顎骨を得たが、雄８、雌１で歯牙咬耗よりみた年令階層は、すべてオトナ期１２才以上、半数はさらにその後期でトシヨリ期のものが含まれていた。オスでオトナザルでしかも年を経ているのはいわゆるハナレザルであったかもしれないし、おそらくそれは群棲する状況のなかで狙うよりも単独の個体の方が狙い易すかったことが考えられる。しかし、実際に容易であったかどうかはなお疑問である。サル猟は縄文狩猟のなかでも種々の意味から興味深い問題を含むので、入念な調査が必要となろう。

また形態学的に現生ホンドザルとの比較も興味ある研究となっている。例えば房総半島の現生種のサルは縄文ザルに比べて小さくぶ厚い下顎骨を持つという。縄文ザルにはそのような特殊化が現われていない。小進化の歴史を考える貴重な資料と考えられている。

海棲哺乳類

海牛目　Sirenia

〔ジュゴン科〕Dugongidae　**ジュゴン**　Dugong dugon

南西諸島の貝塚各時期のものから出土が知られるが、遺体についての正確な記録は少ない。しかし遺跡での出土量は少ないらしく、例えば沖縄本島の渡喜仁浜原貝塚（縄文後期平行）では肋骨、椎骨、中手骨、肩甲骨など１６片が得られたのみでイノシシの骨の出土が２００片余もあるのとはかなりの差である。

その後筆者の一人金子は機会ある毎に古代遺跡出土のジュゴンの遺骸を調べたが、遺跡、時期間の差違は認められるものの、目立って多いという例をみることはなかった。ただ１５世紀以降のグスク期にはいり、その発掘資料には肋骨など多くを得ている例もあるが、個体数の急増を推測させる程ではない。ジュゴンの肋骨は大型獣の少ない南西諸島では骨器の素材として貴重視されているのである。捕獲には成獣、幼獣が含まれている。

鯨目　Cetaeea

〔マッコウクジラ科〕Physeteridae　　Physeter catodon

歯の出土が稀にある。１例は穿孔して明らかに垂飾具的な用途のあったものである。

〔マイルカ科〕Delphinidae　**マイルカ**　Delphinus delphis

カマイルカ　Lagenorhynchus obliquidens

バンドウイルカ　Tursiops truncatus

〔ネズミイルカ科〕Phocaenidae　**スナメリ**　Nemeris phocaenoides

〔ゴンドウクジラ科〕Globicephalidae　**ゴンドウクジラ類**　Globicephala sp.

オキゴンドウ　Pseudorca crassidens

サカマタ　Orcinus orca

イルカ類の出土は貝塚などでけっして稀なことではないが遺跡によってはかなりの量の出土することが知られている。例えば既述した北海道の東釧路貝塚（縄文前期）があり、本州では東京湾口部の横浜市称名寺貝塚、同青が台貝塚、千葉市館山市鉈切洞穴が知られる。東京湾口部の両岸にほぼ同じ文化期の貝塚が、イルカ猟という共通の漁猟活動の基盤の上に成立していることは極めて興味深い。ここで最も多獲されているのはマイルカであって、鉈切洞穴では総数３７個体（環椎にみる最小個体数）のマイルカと上記した数種のクジラ類の歯・骨が出土している。

バンドウイルカは奥東京湾の貝塚である埼玉県春日部市花積貝塚（縄文中期）、同川口市石神貝塚（縄文晩期）で頭蓋が出土し、湾奥にまで当時はいり込んでいたことがわかる。ゴンドウ、サカマタなどは出土例は少ないが、穿孔された歯が出土する。

１９８２年石川県真脇遺跡で多数のイルカ類の遺体が出土した。縄文前期を主体とする時期である。能登半島の北端に近い位置にあり、小さな入江の奥まった場所に位置していた。宮崎、平口両氏によると第１頸椎による個体数はカマイルカ８８頭、マイルカ５５頭、バンドウウイルカ１２頭、ハナゴンドウ１頭、コビレゴンドウ１頭、オキゴンドウ１頭であったという。富山湾を

めぐる古代イルカ猟の興味ある姿が明らかにされている。

鰭脚亜目　Phinnipeds

〔アシカ科〕Ottariidae　**ニホンアシカ**

トド　Eumetopias jubata

オットセイ　Callorhinus ursinus

アシカはかって本州沿岸に多棲したらしく骨の出土例を各地にみる。外海の貝塚に出土が多く、青森県の下北半島の大間崎にあるドウマンチャ貝塚、尻屋崎の札地貝塚、宮城県松島湾にのぞむ大木囲（塩釜市）貝塚、西日本の例で九州の玄海灘の孤島沖ノ島の縄文・弥生期の包含層中にやや多く発見することができた。沖ノ島のような孤島に人々がやって来たのは、ここでのアシカ猟が目的であったからなのであろう。

オットセイは雌の歯牙、四肢骨が出土するかアシカ類に比べればずっと少ない。東北地方の太平洋岸に出土する例がある。

アザラシ類ではフイリ（ワモン）アザラシが東北地方の貝塚で稀にみられる。

鳥　綱　Aves

アビ目　Gaviformes

〔アビ科〕Gaviidae　**オオハム類**　Gavia sp.

カイツブリ目　Podicipediformes

〔カイツブリ科〕Podicipitidae　**カイツブリ類**　Popiceps sp.

小さいカイツブリの骨は出土例も少ないが、大型のオオハムあるいはアカエリカイツブリ Podiceps grisegena 位の大きさのカイツブリが湾口部に近い貝塚での出土例が多い。

ミズナギドリ目　Proecllariiformes

〔アホウドリ科〕Diomedeidae　**アホウドリ類**　Diomedea sp.

〔ミズナギドリ科〕Procellariidae　**オオミズナギドリ**　Calonectris leucomelas

ハイイロミズナギドリ　Puffinus griseus

これらは外海に近い立地の貝塚でみる。以上に述べたアビ類、カイツブリ類などが魚群の探知に役立つことはよく知られている。これらの鳥が海面の小動物や小魚を捕食しているので、その動きが魚群の動きの目じるしになるわけである。広島県の「鳥持網代」（網の代わりを鳥がする漁法）は、シロエリオオハムがイカナゴの群に集まるのを目じるしに、その魚群の下にいるタイやスズキを釣り上げる方法で、4月末から6月末にわたって行なわれていた漁法である。これに近い漁法は各地でみられていたはずであり、石器時代の場合にも考えられることである。

ペリカン目　Pelecaniformes

〔ウ科〕Phalacrocoracidae　**ウミウ　ヒメウ**

この種の鳥は海鳥のなかでも特に出土量の多い種類である。ウミウ、ヒメウは北日本で繁殖し、

カワウは通年棲息し、各地に集団営巣地がある。貝塚のウの類の出土をみると内湾域では稀で、外海に近いか岩礁海岸地域の貝塚に多く、種類もヒメウが多い。

コウノトリ目　Ciconiiformes

〔サギ科〕Ardeidae　**アオサギ**　Ardea cinerea

サギの類の出土はあまり多くないようである。岩手県貝鳥貝塚の後期の貝層から烏口骨、上腕骨が出土している。

ガンカモ目　Anseriformes

〔ガンカモ科各種〕Anatidae

貝塚における鳥骨中では最も多く出土している。特に広大な内湾に近く立地した貝塚である場合には、その出土量はかなりの量に達する。縄文時代に特徴的にみられた内湾地形の発達は、こうしたカモ類の渡来、棲息を可能にしたはずである。ただし、大量に出土するような例は、東北地方で青森県下北半島小川原湖岸、北上川の中・下流の沼沢地帯、関東地方では利根川下流域にられる。現東京湾あるいは奥東京湾など広大な水域があったが、貝塚は支谷内に立地していたために、積極的な捕獲の対象となり得なかったらしい。西日本の貝塚についての詳細は不明である。

このような貝塚からの出土例をみれば、これがガンカモ類の渡りの経路と貝塚の立地条件が深くかかわることは明らかである。ガンカモ類の種類については限られた四肢、その他の骨からの同定は困難であるが、形質を詳細にみると、その主体的な種類が知られてくる。先ずカモ類では先述の淡水貝塚から出土するものの中にはマガモ Anas platyrhynchos とみられる骨が多いが、内湾域の貝塚では大型カモではクロガモ Melanitta nigra、ビロードキンクロ Melanitta fusca などの Melanitta 属、スズガモ Aythya marila などの Aythy 属に属する種類が多いと思われる。アイサ類 Mergus 属は多くはないらしく、貝鳥貝塚でカワアイサ類 Mergus merganser とみられる骨を検出している。ガン・ヒシクイ類は普通では少ないが、内陸の貝塚である貝鳥貝塚ではヒシクイの出土がガン・カモ類の骨のなかで最多量であった。ヒシクイ Anser fabalis は大型のガンであり、我が国に渡来するガンのなかでは最も数が多いという（註）。貝鳥貝塚でマガン Anser albitrons ぐらいになる骨はヒシクイの半分以下であった。ハクチョウ Cygnus 属の骨も少ないがみることができる。

註）１９７０年の林野庁調査では5,５４２羽のガン・ヒシクイ中、マガン６７％、ヒシクイ２７％、コクガン６％、県別では宮城県４１％、石川県２７％、新潟８％、青森６％、その他であった。

ワシタカ目　Folconiformes

秋田県男鹿市大谷台（縄文中期）のフラスコ状ピット中にトビ Miluus nigrans の約１個体分があった。大型種の Haliaeetus 属のオジロワシ位の大きさの上嘴部分を切断した例、

趾骨の中の末節骨に穿孔した例などがある。鋭い嘴や足の爪の部分が切断されて、装身具となったものである。また興味深い例として、この種のワシ類の頭骨をのぞく全身の骨格が茨城県勝田市三反田貝塚で出土している。沖縄本島の勝連城址（中世）も足の末節骨を出土している。今日でもオジロワシの飛来があるという（小野慶一による）。ノリス Buteo buteo の報告例もある。

キジ目　Galliformes

〔キジ科〕Phasianidae　**ヤマドリ**　Phasianus soemmerringii

キジ　P. colchicus

貝塚からの出土例は多い。特に内陸の貝塚や洞穴などでの出土が目立つ。

ニワトリ　Gallus gallus var、domesticus

弥生期以降に列島の各地より出土する。しかし古代の例は少なく、量が多くなるのは中世以降である。鎌倉・江戸の遺跡での出土が多く、特に前者には大型のシャモの骨をしばしばみる。これはおそらく闘鶏のためのものであったと思われる。そして江戸時代に至っても、ガンカモ類などの鳥骨に比べてニワトリの骨の出土は少ない。１９世紀の幕末期の江戸の遺跡（新宿区四ッ谷三栄町）に鶏卵と思われる殻が発見されている。

ツル目　Gruiformes

〔ツル科〕Gruidae　**タンチョウ**　Grus japonensis

岩手県の貝鳥貝塚から出土しているが最近東京湾岸の縄文貝塚からの出土も確認されており、（千葉県船橋市古作、市原市手永、いずれも縄文後期）各地に生息したことが推察される。

また近世の例で、東京都葛飾区葛西城址の堀から検出されており、１７世紀はじめから中頃の将軍家の鷹狩と関係することが推測される。この遺跡からは、ガンカモ類、カラスなどの出土も多い。

〔クイナ科〕Rallidae　**オオバン**　Fulica atra

貝鳥貝塚で５個の骨が、茨城県小山台貝塚の縄文後期の貝塚で２個の骨を得ている。

チドリ目　Charadriifomes

〔ウミスズメ科〕Alcidae

ウミスズメ科に属する大型種ウミガラス類Uria sp.や小型のウミスズメ類Synthliboramphus sp. が東北地方の貝塚から出土する。ウミガラスは冬期一部南下して本州北部の沖合で生息するが当時は海岸の岩礁上に上ることもあったのであろう。

ハト目　Columbiformes

〔ハト科〕Columbidae

出土は稀である。

フクロウ目　Strigiformes

〔フクロウ科〕Strigidae

出土はやはり稀であるがフクロウStrix uralensis、コノハズク Ostus sp. が貝島貝塚、小山台貝塚から出土している。

スズメ目　Passeriformes

スズメ目に属する多くの小型の鳥骨を貝塚その他から採集することは極めて稀である。このうちカラス科 Corvidae、カラスCorvuis sp. のみは貝塚での検出例がある。その出土量は、先にみた北方地域のそれに及ぶものではないが、ややまとまった出土量のあるのは注目される。例えば千葉県大倉南貝塚（縄文後期）では１０種類程査定された鳥骨のなかで、ガンカモ類１１個に対してカラス類６個で、ウの類と同じであった。

この他にスズメ目ではヒヨドリ科Brachypodidae ヒヨドリLxos amaurotis、モズ科 Laniidae モズ Lanius bucephalus、ヒタキ科Muscicapidae　ツグミ Turdus naumauni、シジュウカラ科 Paridae ヤマガラ Parus variusv、ホオジロ科 Emberizadae ホオジロ Emberiza cioides、アトリ科 Fringillidae アカマシコ Corpodacus erythrinus などが小野慶一によって広島県帝釈峡洞穴遺跡で検出されている。ハタオドリ科 Ploceidae スズメ類 Passer sp. が東京都動坂遺跡の近世土壙より多数出土した例がある。

ただこうした小型鳥の出土は量的にも少ないのが普通である。これが解体時の破損によるものか、捕獲量の少ないことによるものか検討を要する。

爬虫綱　Reptilia

カメ目　Chelonia

〔イシガメ科〕Emydidae **イシガメ**　Clemmys japonica

東海地方の幾つかの貝塚に限って出土する。例えば愛知県本刈谷貝塚（縄文晩期）は知多湾の奥にあるハイガイ主体の貝塚であるが、淡水産のイシガメが多かった。

〔オサガメ科〕Dermochelyidoe **オサガメ**　Dermochelys coriacea

現存するカメで最大のものである。太平洋岸関東地方以北の貝塚から知られる。例えば東京湾口部の千葉県富士見台貝塚（縄文後期）からはこれの趾骨に穿孔したものがあり、福島県小名浜地方の薄磯貝塚その他から巨大な上腕骨が出土している。背甲は殆んど保存されないようである。

〔ウミガメ科〕Cheloniidae **アオウミガメ**　Chelonia mydas

アカウミガメ　Chretta caretta

上記の二種が日本近海を回遊する。貝塚からも各地でこれらの遺体を出土する。なかでも房総半島太平洋岸、伊豆諸島、南西諸島など、外海の貝塚に多い。東京湾沿岸貝塚では奥部でも多い例がある。ただし、肋板骨など破砕され、種名の確められるほど保存の良い例は稀である。殆んどウミガメ類の骨からなる骨塚もある。埼玉県春日部市花積貝塚は奥東京湾の貝塚であるが、かな

りまとまったウミガメの骨が出土し、アオウミガメであることが側板痕跡の形から推定された。甲の中央は強く火を受け破壊されていた。甲を逆にして火をかけたからであろう。

〔スッポン科〕Trionychidae　**スッポン**　Trionyx sinensis japonicus

縄文・弥生時代のスッポンの遺骸の出土は殆んど琵琶湖およびその水系の貝塚においてのみ知られ、その他の地域では極めて稀に千葉県下、九州地方で知られるのみである。ただしこれについては、今後調査しなければならない点が残されている。

上述の琵琶湖畔の石山貝塚（縄文早期）、滋賀里遺跡における出土は多い。

有鱗目　Lacertilia

ヘビ亜目　Suborder Ophidia

〔ナメラ科〕Colubridae

貝塚からはヘビ類の骨がしばしば検出される。後世の混入物であるかどうか判断しにくい場合もあり、出土状態が問題となる。貝層中から椎骨が幾つかつながった状態で出土するのは、分断して食べたあとかもしれない。

沖縄の島の遺跡からもヘビ類の骨はしばしば出土する。沖縄本島の石川市古我知貝塚（縄文後期）もヘビ類椎体の多い例で、ハブ Trimeresurus flavoviridis　その他数種のヘビが含まれるらしい。ハブの椎体には全長1.5 m～2 mになる大型の個体のものがあった。

両棲類　Class Amphibia

無尾目　Order Anura

カエル類の出土も洞穴、貝塚などで稀ではない。洞穴遺跡などで多量に出土することがあるが、その所属時期については慎重な考慮が必要である。貝塚では沼沢に面した淡水系貝塚で、貝層中より解体遊離したカエル類が出土するが特に目立つ程の量にはならない。捕食は容易なことと考えられるが、実際はさほどではなかったらしい。岩手県花泉町貝鳥貝塚での淡水貝種オオタニシ、イシガイ、ドブガイの貝層からは、ヒキガエル科 Bufonidae ヒキガエル Bofobufo formosus、アカガエル科 Ranidae 数種が出土している。この貝塚からは、カエルの全身を模した鹿角製品も出土しており、垂飾用の加工をしている。特定種のカエルを模したものではないが、カエルとの関わりを示して興味深い。

節足動物門　Arthropoda

甲殻綱　Crustacea

軟甲亜綱　Malacostraca

十脚目　Decapada

短尾亜目　Suborder Brachyura（Crabs）

〔ワタリガニ科〕Portunidae　**ノコギリガザミ**　Scylla serrata

宮城県石巻市南境貝塚、七ケ浜町大木囲貝塚、気仙沼市田柄貝塚で知られる。１９７９年、大

木囲貝塚出土の標本にあることが同定された。日本では相模湾以南に分布。湾奥、河口の泥地帯に棲息する。田柄貝塚ではかなりの量が出土している。

イシガニ Charybdis japonica

宮城県石巻市南境貝塚で1例を検出している。

〔イワガニ科〕Grapsidae **モクズガニ** Eriocheir japonicus

筆者がこれまで調査し得たカニ類の遺体中で最も多かったのはモクズガニである。特に洞穴遺跡ではこの種の鋏脚の出土が多い。貝塚からも大型の鋏脚が出土している。川、河口に棲息し、川をかなり上流までさかのぼるので、捕獲する機会が多かったと思われる。

アシハラガニ Helice tridens

埼玉県富士見市打越遺跡の縄文早期のピット内より本種の遺体を多数出土した。ヤマトシジミの小型のものが多数伴出している。当時の葦原に多棲したものであり、捕食することは広く行われていたのであろう。

蔓脚亜綱 Cirripedia

完胸目 Thoracica

フジツボ亜目 Balanomorpha

〔フジツボ科〕Balanidae **アカフジツボ** Balanus(Megaba lanus)roseus

オオアカフジツボ Balanus(Megabalanas)volcano

〔クロフジツボ科〕Tetraclitidae **クロフジツボ** Tetraclita spuamosa Japonica

上記のものが知られる。少量の殻片は多くの貝塚から知られるが、特に包含量の多い出土が東北地方三陸海岸の貝塚にあることを林謙作が指摘し（岩手県赤崎町清水貝塚ー道路の拡巾工事で消滅した）、その肉が現在釣餌として利用されていることから、当時においても同様のことが考えられるのではないかということを報告している。

〔ミョウガガイ科〕Scalpellidae **カメノテ** Pollicipes mitella

殻板の出土例があるが多くはない。柄の中の太い筋肉が食用とされたと思われる。九州、沖ノ鳥などの縄文遺跡より出土する。

腔腸動物門 Coelenterata

花虫綱 Anthozoa

六放サンゴ亜綱 Hexacoraliia

イシサンゴ目 Scleractinia

〔トウラキフィリア科〕 **アオバナイボヤギ** Caulastrea tumida

東京湾奥部の幾つかの縄文貝塚（千葉県市川市姥山貝塚、千葉市園生貝塚など）から知られる。現生種は静岡県沼津市江ノ浦湾を北限として生息するという。どのような意図のもとにこれらが運ばれたか問題が残る。

皮動物門　Echinodermata

ウニ綱　Echinoidea

正形亜綱　Rega lania

ラッパウニ科　**アカウニ**　Pseudo centrotus depressus

オオバフンウニ科　**エゾバフンウニ**　Strongylocentrotus intermedius

ナガウニ科　**ムラサキウニ**　Anthocidaris crassispina

北海道の貝塚におけるウニ類の出土は、貝塚による差違はもちろんあるが、外海に近い立地の場合にはその量は極めて多い。蛇田町入江貝塚ではウニ層が形成されていたし、オホーツク関係ののの遺跡ではさらに厚いウニ層が形成されていた。

パイプウニ　Hethrocentrotus mamillatus（沖縄県具志原、米須原貝塚など）

本州以南におけるウニ類の出土は主として外海系貝塚でみるためにその量は多くない。比較的多い例で岩手県上閉伊郡崎山弁天貝塚、気仙郡宮野貝塚、大船渡市清水貝塚などがあげられるが、その採集量は北海道におけるような顕著な出土とは比べ難い。

このことは当時のウニ自体の生息量とも関係するであろうしウニを食用とすることについての慣習が今日とは同じであったかどうか検討も必要となってくるであろう。ウニの利用が食用のみではなかったことは、各地のウニ利用に、以前は農業肥料にする程度であった例もあるからである。

金　子　浩　昌　　早稲田大学考古学研究室

西　本　豊　弘　　国立歴史民俗博物館